

紀 要

- 地震考古学の発展に向けて濱 修(1)
- 滋賀県竜王町堤ヶ谷遺跡出土の土偶形容器と石器について
.....中村 健二(8)
- 弥生時代前期～中期の土器観察覚え書き
—針江浜遺跡と長命寺湖底遺跡の弥生土器—.....小竹森直子(14)
- 古代近江における職能漁民の動向
—松原内湖遺跡出土の刺網系漁網錘の分析から—.....大沼 芳幸(21)
- 滋賀県大津市国分所在礎石「へそ石」の周辺
.....小松 葉子(31)
- 近江国野洲・甲賀郡境をめぐる一考察
—大山川流域の条里地割を手がかりとして—.....辻川 哲朗(44)
- 天井川の生い立ちを考える その3
—天井川と埋没河川との関係について—.....重田 勉(52)
- 比良山系の山寺
—大津市歓喜寺遺跡について—.....小林 祐季(57)
- 明治山と旅順
—乃木希典を求める人々—.....松室 孝樹(60)

25

比良山系の山寺

一大津市歓喜寺遺跡について

小 林 裕 季

1. はじめに

滋賀県西部に連なる比良山系は、南北約24km、東西約3～10kmと細長く延びる山系である。武奈ヶ岳（標高1214m）や蓬萊山（標高1174m）をはじめとする1000m級の山々が屹立する比良山系は、古くから畿内を取り巻く清浄な山々の中で修験にふさわしい霊山とされ、承和3年（836）に嵯峨天皇によって七高山のひとつに勅定されている。平安時代中期以降、天台宗の勢力の拡大とともに天台僧の修行の場となり、多くの寺院が山中に営まれ、江戸時代の地誌などには「比叡山三千坊、比良山七百坊」、あるいは「比良三千坊」と称されている。しかしながらその具体像は不明瞭であり、その実態に迫っていくための前段階として現地に残る遺構を捉えて資料化していくことが必要不可欠である。

本稿で取り上げる歓喜寺遺跡は、『滋賀県中世城郭分布調査』に伴い踏査され、寺院を踏襲するかたちで城郭化したことが指摘された（滋賀県教育委員会1992）。堀切や堅堀といった城郭遺構が認められるものの、各所に寺院の様相を色濃く残していることから、城郭跡としてではなく、寺院跡という視点で概観を試みたい。

2. 歓喜寺遺跡の概要

旧志賀町大物の集落より西方の山腹に薬師堂が所在する。この薬師堂のある字寺山・九僧ヶ谷一帯が歓喜寺遺跡の故地とされる。歓喜寺の創建については『近江國滋賀郡誌』の「大物村誌」に延暦の頃に最澄が建立したとの記載があるのみで、詳細は不明である。弘安3年（1280）の裏書のある「比良荘絵図」にも記載がみられ、歓喜寺は木戸荘全体を代表する寺院であったと考えられる（下坂1997）。正応6年（1293）の『葛川明王院文書』「木戸香藺寄人百姓等申状」に、歓喜寺の薬師如来像は延暦寺根本中堂より移して安置したもので、葛川住人が境を越えて狼藉を行い、歓喜寺の表葺板一千余枚を盗み取ったことなどを訴えている。一千枚以上の葺板とあることから、この時期にはかなりの規模の建物、もしくは複数の建物が存在していたことが判明する。

しかし永享4年（1432）の『朽木家古文書』「祥見田地売券」には、歓喜寺西上坊相伝の私領であった高島郡宮野郷内の田地壹段を三尾神社下司に売り渡していることが記載される（志賀町教育委員会2004）。15世紀中頃には寺院が衰退していく傾向にあったとみられる。また、元龜3年（1572）の元龜争乱の兵火によって焼失したとされ、その後、一村民が薬師像を土中より見つけたことで、文禄元年

（1592）に薬師堂が建立される。江戸時代には薬師堂は平野部の大物集落内にある浄土真宗超専寺の管理となるが、実際は村持の薬師堂であり、堂管理責任者として薬師庄屋まで設けて管理され、村民の尊崇を集めたとされる（元興寺文化財研究所1980）。

3. 歓喜寺遺跡の遺構

歓喜寺遺跡は、堂満岳あるいは烏谷山から派生する尾根筋に挟まれた谷筋の斜面部に平坦面を確保するかたちで立地する。遺構が確認される範囲は東西150m×南北350mに及ぶ。現在は薬師堂までの道が舗装され、遺構が破壊を受けている箇所がある。遺構は主に薬師堂から谷筋を南下方に向かって寺坊跡と考えられる平坦面が確認できる。

薬師堂より南には、方形を志向する平坦面が並ぶ。切岸状に地山を削り出して造成した法面と土塁で囲まれ、内部の法面や裾部に石垣を配する。これらの平坦面は、上幅でおよそ8～15mを測る3条の大規模な堀切によって画されている。この3条の大堀切の存在が、歓喜寺が寺坊を改修して城郭化されたとする最大の所以である。本来、これほどまでの規模の堀切によって寺坊間を区画していたとは考え難いが、堀切の位置で、築地や土塁など何らかの方法によって寺坊間が区画されていたとみられる。

これらの平坦面の東側には、直線道路の痕跡とみられる通路状の平坦面が残る部分もあり、通路状平坦面に面して石垣を持つ出入口が認められる。通路状平坦面は、現在の舗装された道路によって深い部分では2m以上が掘削されているとみられるが、本来主軸となった直線道路部分を踏襲して道路が舗装されたと考えられる。

一方、薬師堂から道路と小川を挟んだ東側の山裾には、小規模でやや不整形な平坦面が確認できる。薬師堂の参道正面に位置する平坦面には、石材を石塁状に並べた区画や、集石された遺構が残る。ここから直線距離で約70m南には、急斜面の尾根と小川に挟まれた緩傾斜地に、矢穴の残る採石途中の岩盤や、加工途中とみられる石材が散見される。このことから歓喜寺において使用された多くの石材は、現地で切り出して調達していた可能性が高い。

3条の堀切に画された方形を志向する平坦面のさらに南には、不整形な平坦面とともに大規模に石垣が築かれ、寺坊などの改変が特に繰り返行われた地点とみられる。石垣は通路沿いに配されるが、通路を辿っていくと崩落もしくは経年による土砂の堆積によるためか、行き止まりとなる箇所が多い。しかし今回図化した遺構のほぼ中央に位置する、播鉢状の地形となる部分については、水場となって

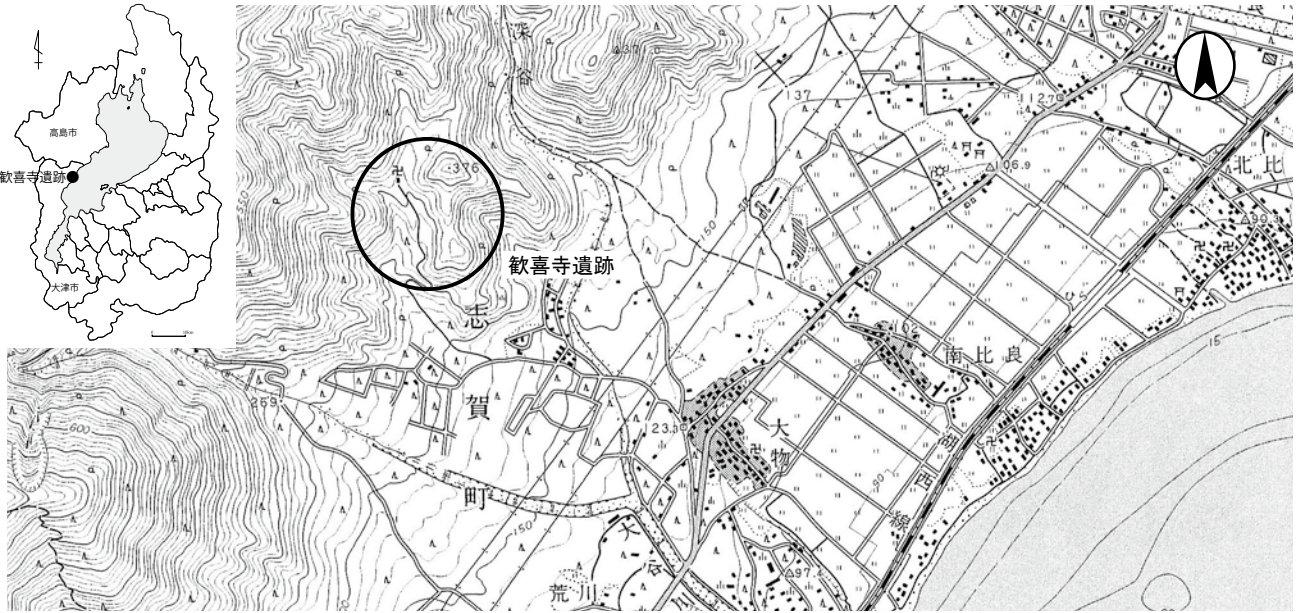


図1 歓喜寺遺跡位置図 (S=1/25,000)

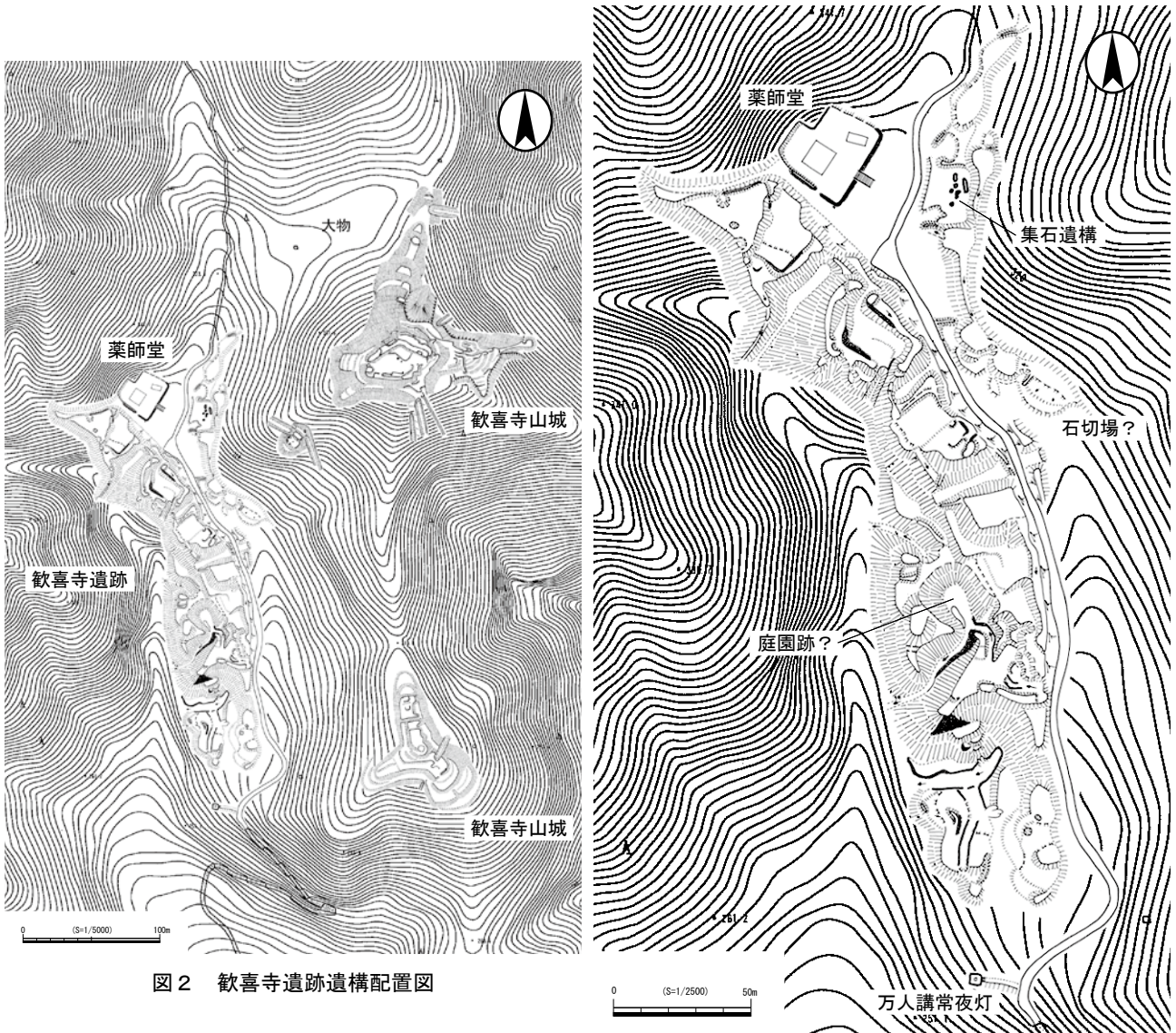


図2 歓喜寺遺跡遺構配置図

図3 歓喜寺遺跡境内概略図

いる落ち込み内に石が立てられることから庭園跡である可能性も考えられる。遺構が確認できる南端には、文化5年(1808)の紀年銘のある万人講の常夜灯が建てられている。

4. 歓喜寺遺跡にみられる遺構の変遷

歓喜寺の創建については詳しくは明らかになっていないが、他の比良山系の山寺と同様に、平安時代中頃に画期があったと考えられる。正応6年(1293)の『葛川明王院文書』「木戸香菌寄人百姓等申状」の記載内容から、13世紀から14世紀頃には一定の規模を誇る寺院に発展していたとみられ、現地遺構にみられる直線道路沿いに並ぶ方形の平坦面や不整形な平坦面は、概ねこの頃に形成されたものと推測される。歓喜寺は木戸荘と比良荘の荘境近くに所在し、「境目の寺院」として荘園支配に関わって肥大化したとみられ、その過程で歓喜寺には多様な属性を持つ寺坊が形成され、規模を拡大させたと考えられる。

湖西地域の山寺は15世紀中頃から寺坊や私領を売却するなど衰退していく傾向があり、永享4年(1432)の『朽木家古文書』「祥見田地売券」にみられるように歓喜寺も衰退傾向にあったとみられる。この衰退した歓喜寺に外部の勢力が入り込んで築かれたのか、歓喜寺自身が必要に迫られたためか不明であるが、直線道路沿いに並ぶ方形の平坦面を中心に大規模な堀切や堅堀といった城郭施設が構築される。さらに東面を遮る尾根の二つの小ピークには歓喜寺山城が築かれる。歓喜寺の築城に関する文献などは残されていないが、近隣に所在する野々口山城が野々口丹波守の城と伝えられ、歓喜寺山城は城郭遺構の構築状況から、野々口山城とともに元亀年間頃の築城と推測されている(志賀町誌編集委員会2004)。信長の侵攻が築城の契機となったと思われる。

元亀争乱によって歓喜寺は焼失し、その後薬師堂が建立されるが、薬師堂以外にも新たに手を加えたと考えられる箇所がある。まず直線道路沿いに並ぶ方形の平坦面に築かれる石垣であるが、自然石を積み上げて表面がやや不揃いな古い様相を残す石垣がある一方で、比較的目地が通り全体として平面に仕上げる意識がみられ、隅部は未完成ながら算木積の技法がわずかにみられるものが多くみられる。さらに方形の平坦面より南側には広範に石垣が築かれる。30cm程度の割石が多用され、通路に沿って間隙も少なく密に石材が積み上げられる。場所によっては法面の傾斜に合わせて2～5m程度石材を積み上げる部分もあり、明確な隅部が形成されるものもある。南端に文化5年(1808)の紀年銘をもつ万人講の常夜灯が建てられていることから、その規模は縮小していたとしても戦国期以降も人々が往来し、手が加えられてきたことがわかる。比良山系の山

寺において、歓喜寺は鎌倉時代からその名が確認され、形を変えつつ現在に至るまで人々の足跡を垣間見ることができる貴重な事例といえる。

5. おわりに

本稿では比良山系の山寺についての一事例として歓喜寺遺跡を取り上げた。比良山系の山寺に限らず、地方に数ある山寺は実態に直接つながる資料は非常に乏しく、発掘調査や寺域全体をカバーするような測量調査が行われる事例は決して多いとは言えない。そうした限られた資料を手掛かりとして検討していくことを余儀なくされる状況にある。

また各地域ごとの悉皆調査の必要性が喚起されているが、個別寺院、ひいては地域における寺院の実態に迫っていくための前段階として、今後も継続して山寺遺構の資料化を進めていきたい。

文献(著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

- 宇野健一(註訂)(1976)『新註 近江輿地志略 全』弘文堂書店
 宇野健一(註訂)(1979)『近江國滋賀郡誌 全』弘文堂書店
 元興寺文化財研究所(1980)『比良山系における山岳宗教の研究』滋賀県教育委員会(1992)『滋賀県中世城郭分布調査報告9(旧滋賀郡の城)』
 志賀町教育委員会(2004)『比良三千坊関連遺跡 遺跡詳細分布調査報告書』
 下坂 守(1997)「近江国比良荘絵図」『中世荘園絵図大成』第一部 小山靖憲・下坂守・吉田敏弘編 河出書房出版
 志賀町誌編集委員会編(2004)『志賀町史』第四巻
 福永清治(2007)「寺院における石垣技術の変遷を追うー近江湖東・湖南地域を中心にー」『忘れられた霊場をさぐる2ー山寺のうつりかわりー近江南部の山寺をさぐるー』栗東市文化体育振興事業団編
 藤岡英礼(2011A)「「山寺」遺構の構造と解釈」『琵琶湖と地域文化ー林博通先生退任記念論集』サンライズ出版
 藤岡英礼(2011B)「縄張り調査と山寺研究」『佛教藝術』317
 米原市教育委員会(2009)『新視点・山寺から山城へー近江の戦国時代ー』

挿図典拠

- 図1 国土地理院1/25,000地形図「比良山」に拠り作成。
 図2 大津市市域図(1/2,500)をベースマップに、小林が踏査・作図。ただし歓喜寺山城については滋賀県教育委員会1992所収図を再トレースして作図。
 図3 小林が踏査・作図。

(こばやし ゆうき：企画調査課 技師)

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.25 2012.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage